

2013年12月22日 クリスマス礼拝メッセージ

聖書：マタイの福音書 2 章 13～23 節

説教：泣く者とともにおられる主

はじめに

皆さんの前には火が灯された四本のろうそくがあります。救い主であるイエス・キリストが、希望の光となって私たちの所に来られたことを現しています。今日は私たちの主のお誕生を覚えるクリスマス礼拝となっています。

世間では、クリスマスは楽しい日、喜びの日、お祝いする日、みなそう思っております。しかし聖書を開くとどうもお祝い一色というわけではありません。イエス誕生に際して、残酷な事件が起きたことが記されています。

1 故郷から追われる者とともにおられる主

1) 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」

13 節の最初に「彼らが帰ったとき」とあります。彼らとは、イエス誕生のことで知り、そのことをお祝いするために長旅をしてきた博士たちのことです。この博士たち、イエスがどこの町で生まれたかは知っていましたが、細かなところまではわかりません。そこで人々に尋ねながら捜しておりました。その時こう尋ねたのです。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。」

博士たちは、今度生まれた赤ちゃんはやがて自分たちの希望の星となると信じていましたから、信じていたことをそのまま言ったわけです。ところが、このことばを聞いて強く反応した人がいました。当時のイスラエルの王であったヘロデという人です。なぜ反応したか。いま生まれたその赤ん坊が大きくなったら、ユダヤ人の王、すなわちイスラエルの王となると言われたのです。自分が座っている王座の椅子が奪われるかもしれない。黙っているわけにはいきません。リスクは小さなうちに摘

み取っておかなければなりません。すぐに博士たちを招き寄せ、居場所を突き止めようとしています。ヘロデの魂胆を何も知らない博士たちは、のんきにこう答えます。「その方はベツレヘムという町でお生まれになりました。これから私たちはそこへ行って捜すところです。」

サスペンスドラマ風に言うなら、ヘロデは博士たちを泳がせ、博士たちにイエスの居場所をつきとめさせるわけです。居場所がわかればあとはこっちのものです。ところが、ついに博士たちもヘロデの計画に気がつきまして、ヘロデの尾行をまいて姿をくらましてしまいます。

2) エジプトへ逃れる

とは言え、執念深いヘロデはこんなことであきらめるはずはありません。どこまでも追いかけて来るでしょう。そこで、マリヤの夫であったヨセフは、幼子イエスと妻を連れてエジプトに逃げ、ヘロデが死ぬまでそこで避難生活を送ることになります。

先日ラジオを聞いていたら、たまたま福島に住んでいる三十代の男性の話が放送されていました。その方はそれまでは普通に暮らしていたのに、原発事故が起きたことでしばらく避難所生活をしなければならなかったそうです。そこで子どもたちに段ボール生活をさせてしまい、つらい思いをさせてしまったと語っておりました。親として非常に申し訳なく、そして悔しく感じていらっしやる様子が伝わってきました。

ラジオを聞きながら、主も同じ経験をされたことに気がつきました。主は、故郷を追われた者とともにおられます。

2 泣き叫ぶ母親たち

ヘロデはその後どうしたか。16 節。「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。」

ヘロデには 15 人の子どもがいたのですが、王位継承を巡ってそのうちの 3 人を自らの手で殺したと言われています。そんな人ですから他人の

子どもを殺すことなど訳もなかったのでしょうか。

18 節。「ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ。」

ラケルとは、子どもを殺された母親たちを現す名前だと考えられています。ある日突然、自分の目の前で理由も告げられずに子どもが殺されます。「ラケルは慰められることを拒んだ」とあります。

皆さんはこんなことはなかったでしょうか。悲しみがあまりにも深いと、だれかに「元気を出してね」と言われただけで、無性に腹が立つことがあります。「あなたに私の気持ちなんかわかるはずはない。」そう言い返したくなるのです。どんなことばも慰めにはなりません。かえって、ますます傷つくだけなのです。

どうしてこんなことになるのでしょうか。悪いのはだれか。直接にはヘロデの責任です。では、神さまには責任がないのでしょうか。

イエスが私たちの所に人となって来られた。その結果、まったく関係のなかった子どもたちがとぼっちを受け、殺されてしまいました。何の関係もない母親たちが悲しみのどん底に突き落とされてしまいました。

イエスは神さまです。神さまは何でもおできになる方だと聖書に書かれています。なぜヘロデのことを止めなかったのか。イエスはこの事件についてどう考えておられたのでしょうか。疑問になります。

3 神はどこにおられるのか

1) 何もできない神？

このとき、イエスはなにをしたのか。「情報を制する者がこの世を制する」ということわざがあります。イエスのところにはいつも主の使いが現れます。いろいろな情報が伝えられ、間一髪いつも無事に逃げています。子どもたちは殺され、いっぽう自分はエジプトに逃れ生き延びていきます。神が偉大な計画を成し遂げるために、少々犠牲者が出ることは避けられない。そんな話なのではないでしょうか。もし、そんな話だというのなら、私はそんな神さまを信じたいとは思いません。

2) 子を失う親とともにおられる主

母親たちは、子どもを殺されて、泣き叫びました。そんな母親をいつたいたれが慰めることができるのでしょうか。皆さんも経験があると思いますが、自分が悲しいとき、どんなことばが一番慰めになったか。自分と同じ苦しみを味わったことのある人のことば。同じ経験をした人のことば、ではないですか。「私もあなたと同じ目にあつたことがあるから、あなたがどれだけつらいかよくわかります。」そのことばを聞いただけで、少し慰められる気がします。ラケルも同じ経験をした人でなければ慰めることはできません。

神さまもラケルと同じことを経験しました。父なる神は、ご自分のひとり子であるイエス・キリストを十字架で失いました。ご自分の子どもが殺される。ラケルが経験したことを神である方も経験されました。神は子どもを失った者とともにおられます。神は、ラケルと同じ苦しみを味わってラケルを慰めようとされるのです。

3) 悲しみを背負う者とともにおられる主

でも、まだ疑問が残ります。イエスは、ご自分が生まれたことでこんな不幸なことが起きてしまったことについて何も考えなかったのでしょうか。

皆さん、自分がイエスであったならと考えてみてください。大きくなってから、母親から教えられたとします。「あなたが生まれたとき、実はこんな事件が起きたのです。あなたはエジプトに逃げて無事だったけれど、その代わりベツレヘム周辺の子どもたちが殺されたのです。」そう聞かされたとします。そうしたらどうしますか。「自分には関係ない。」そう思う人はいないでしょう。多くの方は自分を責めるでしょう。自分が生まれたことで人を不幸にしてしまった。自分は生まれてこなければよかつたのではないか。そう思うはずです。

皆さんの中には、自分さえいなければあの人は、あの家族は、幸せになっていたかもしれない。不幸の原因は自分にある。自分は生まれてこ

なければよかった。そんなふうに苦しんでいる方がいるかもしれません。あるいは、自分がなにかをした訳でもないのに、ただ自分がいるというだけで、ある人を苦しめてしまう。そういうこともあります。問題を解決するために何かできるか。何もできません。どうすることもできません。もう取り返しがつかないのです。この苦しみを一生抱えて生きていくしかありません。

イエスも同じことを味わわれました。自分が生まれてきたことによって、人を不幸にさせてしまいました。自分だけ生き延びてしまいました。ご自分の苦しみとして生涯背負うしかありませんでした。

神さまはどんな方なのでしょう。神社のお社の中で静かに座っておられるのでしょうか。高い空の上において、悪いやつはいないかと目を光らせている。そんな存在だったのでしょうか。

まったく違います。この方は、故郷を追われた者とともにおられます。子どもを失った親と一緒に涙を流します。取り返しができない苦しみを背負われます。

悲しみに泣き叫ぶ声を聞き、何とかしなければならぬと考えます。そのために、ご自分のからだを十字架でささげ、いのちをお捨てになり、私たちに救おうとされます。

でも、あの殺された子どもたちはどうなるのか。もう、手遅れではないかと思うのでしょうか。いいえ、手遅れではありません。18節はエレミヤ書31章15節からの引用ですが、その続きのこうあるのです。「あなたの子らは自分の国に帰ってくる。」主は必ず、子どもたちを母親の元へとお取り戻します。

そのために、この方は神でありながら人となってこの世に来られました。いま苦しんでいる者の所です。取り返しがつかないと苦しむ者の所へ来られたのです。

クリスマスの恵みを覚えて、ともに喜びたいと願います。